



集落の空間、その持続的自律的空間構造と 近代主義計画モデルとの矛盾

重村 力*

Space of Hamlet, Sustainable and Autonomous Spatial Order, A Contradiction to Modern Planning Theory

Tsutomu SHIGEMURA*

1. 集落の自然的性格

集落という言葉は本来都市集落や農村集落など居住地の集積一般を指すのが正しいがここでは通例に従い集落について、村落の意味で用いる。集落とはひとまとまりの居住地を意味する。だが集落が、近代以降の計画やインフラストラクチャーに規定され短期に形成された居住地と大きく異なるのは、自然的条件に規定されさらに時間をかけ社会的条件に関係づけられて居住地空間が形成されてきた点である。集落空間は居住地として人為的に形成され、時間をかけて調整されてきたのだが、あたかも自然に形成されてきたかのように見える。集落には豊かに自然が介在している。居住地内にも緑地の占める率は高く、さらに圃場などの生産緑地や生活の持続を支える里山などの緑地が居住地を包んでいる。集落の立地においては地形を選択し、地形の庇護や地形を利用した生業・生活の利点などを大いに重視し、それらが植生の選択操作や土地利用（海岸や河川の利用）に反映している。したがって自然地形と植生・土地利用・集落居住域の関係が包摂関係として成立している。同時にこの関係は有機的に生産空間や生活空間を内包した構造を形成しており、その大きな拠点である住宅および屋敷地はその構造の要となっている。集落の空間構造のありようが散村・集村の違いなどとして表現されるのだが、これらを構成する要素と自然に対応したあらわれ方は実に多様である。

2. 集落の社会的形成過程と持続性

近代的な計画によって大きく改変されていない集落空間は、近代以降に形成された居住地と異なる特徴を持っている。自然は微細な単位まで豊かに集落空間に編み込まれている。住居相互の関係はよく吟味調整され、配置は幾何学的ではないが非常にフラクタルな構造をもち、一定の多様性を容認する暗黙の大きな規則性を内包し、地域の住宅様式を単位とする町並み・家並みを形成している。

集落は社会的な単位でもある。住戸＝家族を単位として、基礎集合としての群＝数戸から二十戸弱までの群を形成し、さらにこれらが1～数群集まって一つの集落を形成する。この数値については多くの研究者がすでに指摘しているが、一般の人間組織＝会社・軍隊・スポーツチームなどを通じた個人からなる組織単位の人間数とも近似的、また指の数に起因する脳の数値認識に基礎があると推察されている。これらは居住を通じたさまざまな協同の単位である。土地や環境を管理する単位であり、産業生産の単位であり、かつてはより広域の社会に対する意思表示の単位でもあった。近代的空間と大きく異なる点は、これらは住居を単位とする社会の単位（家族）を基礎に形成されている長期の参加型環境管理の秩序であることである。すなわち個々の住宅の形造的劣化陳腐化にこたえ、また世代変化などの居住者の内部事情を反映し数十年単位で個々に変化する。時に単位の消滅や窮乏も行われるのだが、これらからなる住宅群と集落の関係は相互に調整され、更新が行われるがそのつど新たな平衡を見だし、調和が更新され、持続的に充実してゆく構造を持っている。これらの社会的な単位の維持・持続的更新が損なわれると、集落は衰亡の道を歩む。

*教授 建築学科
Professor, Dept. of Architecture

3. 意識空間としての集落の構造

こうした物的な構造，社会的な構造に加えて，もう一つ大きな空間構造として，意識構造をあげなければならない。集落空間はさまざまな信仰的な空間性を帯び，そこには意識と結びついた多くのオブジェクトがある。さらに平常の空間でも生活の節目や場面によっては特別な意味が付与されることがあり，日常もそのことが心の底に意識されている。その意識がまた空間を際立たせ強調することになる。鎮守の森は伐らないなどの行為によって鎮守はひときわ異なる植生をもち目立つ存在となる。このような構造は，日常の活動に基礎づけられているのだが，これに加えて非日常＝年中行事や生死や成長や老いに関わる通過儀礼・天候・豊不作，さらには長周期の出来事（開拓や災害など）に起源を発するさまざまな祈り願ひ想いが加わっている。このような意識空間の構造（心的空間構造）は，社会的な空間構造とともに物的な空間構造の背後からこれらを強化し保持している。日本では今日消滅する集落，あるいは消滅の危機にある集落が，いわゆる「限界集落」として議論されるようになった。しかし内田多喜生によれば 2005 年農林業センサスではこれまででもっとも狭義に定義して調べた結果，集落機能のある農業集落はまだ 11 万 1 千も存在している。⁽¹⁾ここでは集落機能とは合意形成を経て，農業生産に関わる環境資産を共同管理している活動の存在することとして厳密に定義されている。集落の消長はこの社会的単位による集落空間の管理に関わっており，それらの背後には集落意識空間の保持も含まれていると筆者は考える。

4. 集落の骨格的構造とその発展

さてこのように形成されてきた集落空間における個々の公的空間は，一空間や一施設に単一の機能を期待し，足し算的積み上げ的に計画され形成されてきた近代都市計画のそれとは大きく異なり，複合的意味が付与されており，（たとえば道と水路と農地のように）同時に集落に存在するさまざまな空間と密接不可分な共存関係を構築している。これらが形成する骨格的構造について見てみる。

2006/6/28 に逝去した地井昭夫博士元日本建築学会農村計画委員長（元広島大学教授 広島国際大学教授）に敬意を表し，地井の漁村に関する講義資料を参照しつつ，筆者自身がこの集落を観察して見る。伊根浦（京都府伊根町平田亀島地区）の浜沿いの舟屋と母屋からなる配置構造は，干満の差が著しく少なく平地や緩斜面がないこの浦の自然的構造と，浜辺に接する社会的権利＝株によって規定されている。立地した舟屋とその奥の母屋との

間の連続する空隙（にわ）が道路となるのは近代以降の乗り物の登場からであるという。ここではいわば浦（湾）が第一の構造であり，そこにとりついた舟屋と母屋がなす道の構造が第二の構造である。そこから山の方へ農地や寺社や学校などの施設が発展した浜に沿って第三第四の構造が発展している。

より複雑化した構造ではどうであろう？同じく地井講義資料に登場する下関市豊北町島戸集落では，小さな湾を取り巻く緩斜面を住居が埋め尽くしているが，浜辺の道から居住地を形成する道筋がほぼ三重の格子状で単位を形成されている。また寺院や神社に向かって放射状の主要道が中央の市場などの漁港施設から延びており，そこに公共施設がとりつくと共に先の居住地の単位を結びつけている。

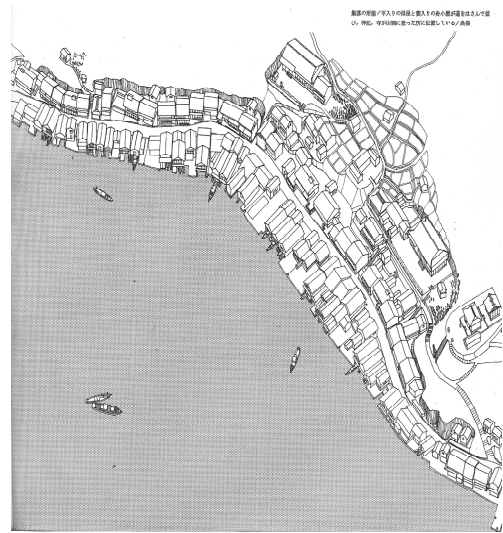


図1 京都府伊根町伊根浦

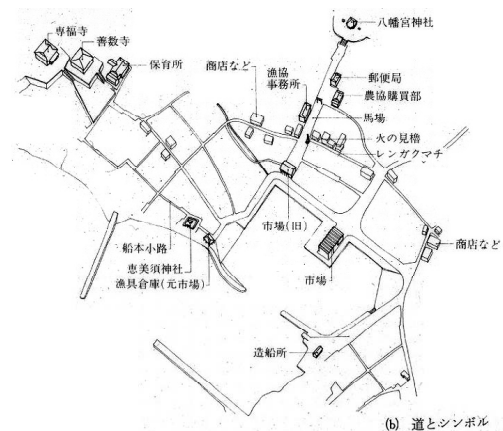


図2 下関市豊北町島戸

5. 骨格構造の複合的性格

これらの骨格構造はさまざまに複合的役割を果たしていると考えられる。居住に関わる生活の機能や産業的生産の行為の場となると共に、交通などの複合的な機能が互いに互いを制約する形でいわば融通しあって存在している。だから道とはいっても通過交通は大いに制御されている。また集落内の内部交通や内外の交通も非交通の機能たとえば市やこどもの遊び、産物や漁具の乾燥といった機能が成立しあう範囲で成立している。非日常の行事、祭りや葬儀はこれらの骨格を全面的に変換して共同空間としての性格をあらわにする。このような非日常の節目において、これが「天下の公道」のように無限定な公共空間ではなく、集落の社会的単位によって管理され、集落の意識空間の構造に強く組み込まれ、視覚的にもいっそう強調された共同空間の構造として明らかになる。60年代末期から70年代に歩車共存の考えが近代都市計画にもようやく取り入れられるが、集落はもともと複合的であった。もうすこし正確に言えば近代以前の都市空間も含めて集住空間はそのような複合性を帯びていた。都市では部分的に空間が継承されることはあってもかつてあった構造性を失っているのに対し、多くの集落ではその中心性と全体性を含めて現代でも読み取れる構造をこれまで持続してきたといえるであろう。

6. 都市に残る集落のなごり

関西には地藏盆という習慣が広く強く残り、関西の都市を8月24日前後に注意深く歩いていると、こんなにも多いかと思うほど密度濃く地藏が分布していることに気づく。だいたい小学校区や幼稚園分布などのスケールよりずっと細かく、先に述べた数戸から二十戸までの基礎単位（都市では隣保）のスケールまたはそれ以上細かい密度で地藏が分布している。地藏堂などは独自の境内などをもっていることは少なく、たいがい道路に向かった小さな祠（ほこら）として存在している。地藏盆の日が来ると、それまで隠れていた広がりや突然見えてくる。神戸市などで比較的近年（戦後）まで集落の骨格が残っていた地区（たとえば灘区・東灘区）では、区画整理や都市計画道路などのつくった秩序に対して、まったくこれを無視したしつらえと利用の形態が出現することがある。たとえば突然道路をまたいで竹とよしずのルーバーがかけられ、車道にゴザ（うすべり）が敷かれ、ベンチや座卓がおかれて、子どもたちをもてなす空間や大人たちの待機場所が作られる。道路占有の許可などとは無縁に至極当然の行為としていわば無礼講のようにこの空間が現れる。失われていた集落空間の出現に驚き、戦

前の地図を取り出して確認してみると、隠れていた構造が一時復活したのだとようやく納得することができる。古い住み手から見れば日常の都市空間の方が異常なのかも知れない。

7. 広域骨格の暴力性

70年代に沖縄県北部の西海岸の恩納村・名護市の計画⁽²⁾を行っていた時に直面した問題に、(米軍)軍用道路1号線という道路が集落を突っ切って走り、この騒音や危険を何とかしなければならないという課題があった。近代以前では海岸線の集落は必ずしも海岸線の道路によって結ばれていたのではなく、古い道は尾根道など山道でむしろ海辺の移動は珊瑚礁で波も穏和な海路に頼っていただろうし、台風などの暴風雨時には海辺は不安定稲荷黒であったことが推察される。海岸線の道路骨格は明治以降も未発達であり、後に広域を結ぶ道が必要になったとき、集落の中に海岸線に沿った水平軸となる道路があり、これらをつなぐ形で広域道路が形成された。だが軍用道とはもともとあった道路にアスファルトを簡易舗装しただけの道路である。ベトナム戦争中戦車や戦闘車両を積んだ大型車両が北部の演習場と中南部の中枢を結んで疾走するので道路は傷む。そうするとまたその上にアスファルトをつぎたし舗装することになる。72年の復帰時点で、道路は周囲の家から数十センチ、時に一メートル

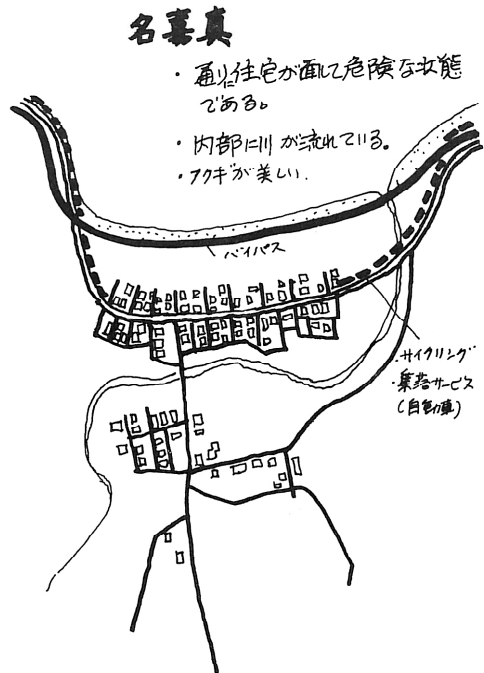


図3 恩納村基本構想 名喜真バイパス

ルも高いものとなっていた。復帰以降の計画でこれら交通の集落分断進入を回避する計画を策定する必要があった。だが集落に接しながら集落内交通を回避する的確な通過ルートはない。珊瑚礁の浜と集落の関係、集落と背後の山（くさてのもり・うたき）との関係を注意深く吟味しなければならぬことがわかった。⁽³⁾ やがて正解は海側バイパス・山側バイパスのいずれにもないことに気づいた。必要に応じ広域バイパスを遠隔ルートに設置しつつ、集落をサービスしつつ広域をつなぐバスルートとなる国道などは、場所ごとに吟味してルートを集落分断型ではない形を選ぶ必要があった。集落の意識空間構造の根幹をなすヤマとムラ、ハマとムラの伸びやかなアクセスが確保される場合においてのみ、部分的な迂回路が許されるのである。沖縄本島北部＝山原（やんばる）において集落の前の浜、後ろの山も集落空間の大事な要素である。浜は漁労や海産物採集の場となるだけでなく、ハマシビ＝浜遊び＝海辺の歌垣ともいえる民俗行事の場であり、後背の森はクサテヌムイ＝腰宛の森＝集落抱擁林として重視される里山であり、内部にウタキ＝御嶽など信仰の対象となる聖域＝鎮守を持っている。

8. 集落空間と防災区画整理

1995年阪神淡路大震災に際してきわめて被災の程度が大きかった北淡町（現淡路市）富島地区には震災復興事業として区画整理がかけられることになった。淡路島の北西の沿岸の漁村集落であるが、集落規模が大きく、集落内道路は2m程度の狭いものが多く、広域道路もまた狭かったため、災害に安全な居住地をつくるという名目と、接道条件をみたした建築基準法上の適格宅地をつくり出すという大義名分のもとに区画整理がかけられた。賛成反対入り乱れての紛糾の末、区画整理事業は何度も原案を変更して難航し、10年後ようやく仮換地が終了、12年を経た現在ようやく完成像が見える形になってきた。ここでは15mの幅員の広域道路をはじめ、6mを超す広幅員の街路が縦横につくられ、たしかに道路率は増えたが、広がった道路はかつての漁師町のような様相を呈した。広い道はただ意味もなく駐車空間になり、それまで軒を接するようたてられていた漁師町の住居は、車道歩道を介し小さな扉を回して建てられる都市型戸建て住宅のように変わった。かつて狭い漁村の街路は、おびただしく存在した地蔵や稲荷、恵比寿、弁天などの祠（ほくら）や社（やしる）、寺を結節点として編み目のように組み立てられていたが、いまではこれらの祠の多くが道路から切り離された場所に取り残されたり失われたりしている。人口は3割、住戸数は2割減った。（21ha



図4 富島震災復興土地区画整理事業計画

震災以前 720 戸)。まだ十分な社会調査が行われてはいないが、社会的構造がシャッフルされると共に、共同空間が消滅し、公共空間が肥大化し、社会単位ごとの空間管理が行われる構造が失われたのは明らかであり、信仰空間の減少と後退は意識空間の破壊にもなっていると共に、集落を結びつけていた構造が失われた。かつての細街路（＝網道とよばれた）にそって民家がひしめき合っていたときは近隣の人が誰それはどの部屋で寝ているとすることがわかっていたため、大半の家屋が倒壊するという惨事の中でほとんどの人が生きて救出されるという不幸中の幸いがあったのはこの空間構造のおかげでもあった。車社会にはなったが人づきあいと鍵をかけずにすむコミュニティが失われたと嘆かれている。区画整理はドイツにおいて相続を重ねて利用不可能なほどに細分割された街村状の土地権利を清算し、必要なインフラを均等負担により生み出し、新しい付加価値の大きい都市空間を作り出す不動産経済的観点にもとづく近代主義的手法であった。都市計画においては何がえられるかという視点も大切であるが、持続してきた何が失われるかという視点はもっと大切である。一方で現状の持続を尊重しながら不足分を補う手法をとった島の反対側北東部の東浦町（現淡路市）仮屋地区では漁村集落整備事業と密集住宅市街地整備促進事業の合併施工を行い、顕著な成果をあげ従前の延長線上に集落生活が復活したことで富島地区は対比的である。集落の空間がもっていた複合的機

能はそれを清算して単能的近代空間を足し算によって付加しても回復しにくいこと、社会空間と意識空間に裏付けられた空間の改編は容易ならざる結果をもたらすことを、この結果は示している。

9. 土地改良と集落計画

1988-89年に関わった滋賀県蒲生郡蒲生町横山集落においては、琵琶湖総合整備事業に関連して集落農業のための大規模区画の土地改良事業の実現が目的とされていた。それまでの土地改良事業であると、優良な圃場の実現のために、集落周りの空間やお墓・社寺などの信仰空間、集落近傍に通常ある菜園用地、農村のさまざまなレクリエーション空間が犠牲になることが少なくない。ここでは徹底した調査と参加型の計画立案を行うことにより、これらの空間とその発展形を計画に盛り込むことに成功した。⁽⁴⁾ 約50戸の集落の居住域近傍ではレクリエーション空間や立地可能性のある共同施設の用地を留保し、集落の外周に自動車道路、バス停用地駐車場大型農機具庫用地を確保すると共に、塊村状の集落内部への自動車の進入路は縦横一筋ずつの最小限とした。集落の内部は基本的に自動車進入のための若干の拡幅を行うほか、社寺やここでも随所にある祠や住宅を含めて大きくは変えず、むしろ現在の景観的空間的特徴を変えずに住宅を改良し、また建て替えるにはどうしたらよいかというガイドラインを作ることにした。集落の後継者が新宅を造る住宅保留地を集落の外周道路の内部に確保し、広域で

は内水からの増水に備えて古くからある堤と可動の堰板を常に皆がレクリエーションなどで意識する場所におくことにした。集落を取り巻く大きな自然の中に墓地もある山を公園として整備し、そこに至る道を特別な道としてつくるなどの計画を行った。山間部にある棚田とため池を伝統農法保存農地として保存整備する提案をしたがこれはかなわず、通常の圃場整備がなされた。

現在この集落は集落単位で営農を共同化し、先進的有機農業を行い、こどもたちのにぎやかな声も聞こえる集落として知られる。ここでは近代的手法と集落空間の持続発展を強く意識した計画が実現できたが、第一にムラづくり委員会という40代の後継者世代と共同で作業したこと、さらにはムラに泊まり込みわかりやすく絵で示

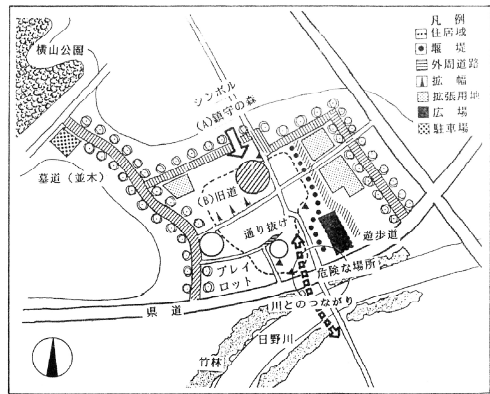


図5 横山集落空間計画概念図



図6 横山集落の当時の現況図

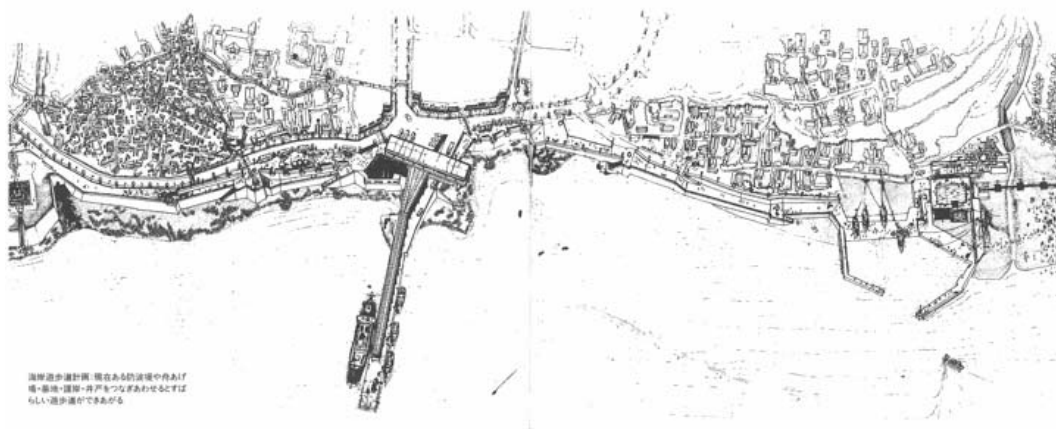


図10 大島計画 海岸計画図

しながら合意に導いたことなど、ワークショップとフィールドワークを重ね、住民と専門家が共に集落空間を読み解き、発展形を探る手法がそれを可能にした。⁽⁵⁾

10. 大島計画と発見的方法

これら紹介した事例からも明らかのように、自律的に形成され持続的に充実してきた結果構成された集落空間には、個別機能の集合によって都市空間を構築しようとする近代主義都市計画モデルでは置き換えることのできない文化的豊かさが内包されており、逆に生活空間一般を私たちが計画対象にするときに大いに学ばなければならない内容を持っている。まことに「集落は生活空間の学校」である。このような集落空間が都市空間とは別に国土に11万もあるという豊かさは日本の国土を保持する重要な拠点網であり、また地域社会を持続的に継承して行く上での重要な社会的基層を構成しているとも言える。

このような集落に対する空間整備の方法は漸進的で空間文脈を読み取りながら持続的に充実して行く方法を住民やステークホルダーの参加によって進めなければならないのは多くの事例から明らかである。そして実は都市空間をその生活文化的背景を損なうことなく充実しながら環境整備して行く方法も実はこの方法によらなければならないことも集落における経験から学ぶことができる。私たちはこのような方法を発見的方法と名付けている。発見的方法とは前述の地井昭夫（のち広島大学教授）や大竹康一（のち象設計集団）が吉阪隆正（早大教授）に率いられて1960年代に、伊豆大島元町の大火後の復興計画を練った大島計画の際につくられた言葉である。筆者は最末端の支援スタッフであった。ここではボンエルフに先立つ歩車共存の手法や、神社参道や聖水、墓地な

どの信仰と共同行事に関わる空間を、復興区画整理に盛り込んだ。⁽⁶⁾元町の海浜整備計画は地井昭夫によって描かれたもので、浜における朝市や祭り、早朝や夕方の人々の振るまい、桟橋に着いた観光客の行動観察などからその空間性を読み取り、浜辺の空間の使われ方と潜在ニーズいわば期待され方を観察発見し、それを計画案にしたものである。集落空間の多義的性格とその全体的構造性を洞察し、その発展形を発見してゆく手法こそ近代的計画の呪縛を解く道であろう。

本稿は2007.8の日本建築学会大会研究協議会資料「近代の空間システムと日本の空間システムの形成と評価」pp.9-13における重村力「集落の空間 その構造をどう読むか 持続的充実の理論と近代主義モデルとの乖離」を加筆修正したものである。

参考文献

- (1) 内田多喜生、「調査と情報」、2006年6月
- (2) 恩納村基本構想案 象設計集団 重村 大竹 地井
名護市土地利用基本計画 策定グループ 大竹 重村 地井
(1977年日本都市計画学会石川賞受賞)
- (3) 仲松弥秀、「神と村」、琉球大学沖縄文化研究所刊、1968年
- (4) 農村地域における整備技術調査 昭和63年度報告書「横山地区農業集落計画」、農村地域における整備技術調査検討会 近畿地方部会 全国土地改良事業団体連合会、1989年
- (5) 李瑛一、重村力、横山集落の共同空間とその性格—コミュニティの共同空間の場所性—、神戸大学大学院自然科学研究科紀要9-B、p61-73、1991年3月
- (6) 大島元町復興基本計画 1965 早稲田大学吉阪研究室 吉阪隆正、大島元町環境計画 1966 同